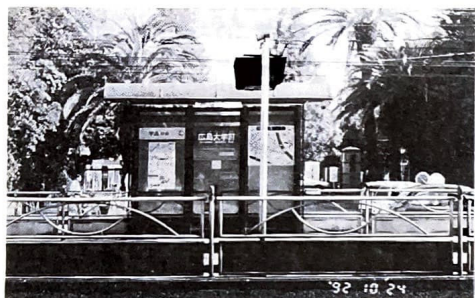
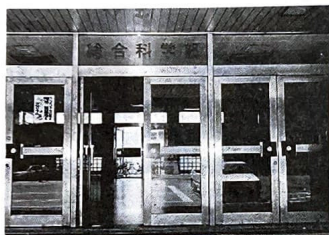


# 東千田キャンパスを



← 1-1

思えば大学入試以来のお付き合いである。ここから見ると広大もきれいなのだが…。(広電電停—広島大学前)



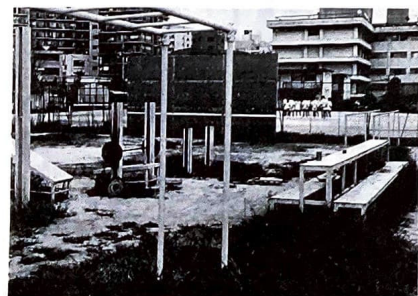
↓ 1-4

移転計画が発表され、増築する予定の校舎はプレハブに化けてしまった。でも、教室にはエアコンもあるし、流しもある。でもプレハブなんだよなあ。西条では多分建てられない(と思うが…)。(左プレハブ4号棟、中央5号棟、右3号棟)



← 1-3

昭和44年に増築され、それ以降も増築する予定であったが、昭和48年移転計画が打ち出され、増築が中止となった。なお、増築をプレハブ新設により補う。



← 1-5

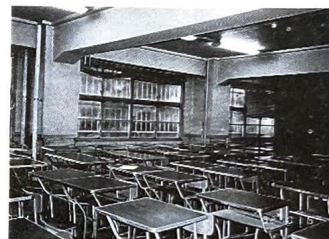
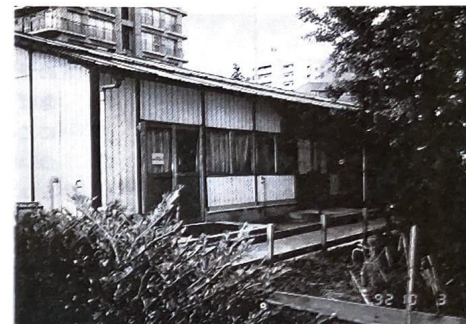
テニスコートの裏は関係ない人には、本当に関係ない場所である。様々なトレーニング器具が置かれているのが分かるだろうか。天気の良い日に踏み台昇降の台に腰掛けて食べるお昼はおいしい。ひなたぼっこにも最適である。(テニスコート裏)

# 記録する 1. 建物編

→ 1-6

北門の横にある、この小さな1階建てのプレハブで、保健体育健康科学実験、自然環境の土壌・水処理、極低温実験、及び人間行動実験が並行して行われていたんです。

(プレハブ7号棟(雑居実験棟))



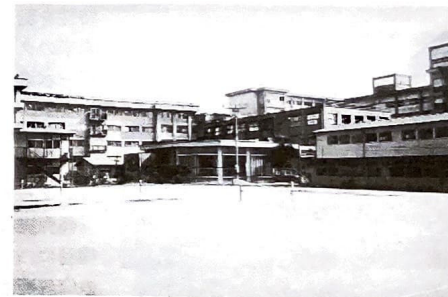
← 1-7

いつも薄暗く、汚かった半地下教室。外国語やプロ通でお世話になったが、夏は蚊には絶好のエサ場だった。冬はすきま風が吹き込み、環境条件はよろしくない。自転車置き場からの騒音と上階から流れてくる実験後の排水の水音が耳障りであった。(15号教室)

↓ 1-9

こうやって見ると、総科の建物は結構複雑である。テニスコートでは、生徒はもちろん、先生も短パン姿で汗を流してボールを追っていらっしやった。

(左側は自然科学棟、中央は旧自然棟、右後ろは新館)



↑ 1-8

◇ 体育館の前では、フォークダンス部がよく踊っている。体育実技、聴講手続きと体力測定でお世話になった。

◇ 体育実技中の卓球は、授業後半は試合形式なのだが、その勝敗が成績に響く。経験者が有利なのは当たり前じゃないか。カモにされている今日この頃である。(心の叫び)



# 東千田キャンパスを



← 2-1

◇中核派の人が乗り込んで来たとき、わたしたちは独語の予習に追われていた。「やった一中核派だ!!」このときばかりはうれしかった。時間が稼げる!!こんなふう  
にこの写真を見ると、独語の予習との戦いを思い出し、  
つい目に涙さえも浮かんでくる。

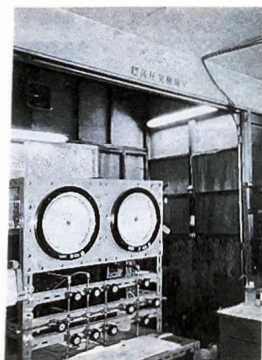
◇5コマが終わってここから見た夕日が美しかった。  
(601号教室にて)



2-2 →

大講義室の裏にひっそりと、プレハブ6号棟はある。開きにくい戸を無理やり引っ張って入ると、右側に、共通セミナー室という部屋がある。ロの字に並べた長机、黒板。少人数のゼミや講義にあつらえむきの部屋だ。

大講義室のマイクの声が響くが、人里離れて落ち着くことができる。窓が片側にしかないので、風が通らないのが玉に傷である。(共通セミナー室)



2-3 →

水素吸蔵合金の吸蔵特性を測っています。未来のクリーンエネルギー水素のために活躍します。(M2 中尾・M1 田端 {藤井研})



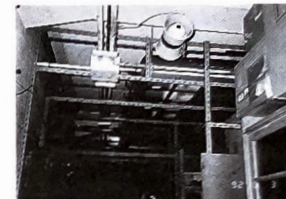
← 2-4

体育実技がソフトボールだった私はサッカー一部の練習を横目に、ソフトをした。同時に3試合があったので、外野の守備範囲がかさなり、球を拾いに行くのが大変だったことを思い出す。

# 記録する 2. 授業編

↓ 2-6

研究室が狭いので、研究の activity を研究室の面積で割ったら、その高さはギネスもんですよ。(天野教官)



2-5 →

これはヘリウムのボンベで、通常の研究をやる大学では置いておくスペースがあるのですが、広大は移転が前提になっていたのであんな危険な場所で皆さんにご迷惑をおかけしました。新キャンパスにはボンベ君が安らかに眠れる場所がありますので、ご安心を。いままでもボンベ君も学生君もゴメンね。新キャンパスでも頑張ろう。(大林教官)



← 2-7

生物学実験の最中にお邪魔しました。皆さん真剣に顕微鏡をのぞいていらっしゃいました。やはり女子学生さんには指導に力が入るのでしょうか。

(第2生物学実験室 (S211号室))

→ 2-8

第2化学実験室ではガラス細工の思い出がある。ガラスは高温のガスバーナーで加熱するので、火傷をする人が必ずいる。どんなに注意してもまだ熱いガラスにさわる人がいるのである。しかし、約30人のクラスでひどい火傷をするのは2~3人であるので、10%以下なら問題ないだろうという統計学的かつシビアな見解で実験はおし進められる。(自然環境研究コース2年 川口)





# 東千田キャンパスを

3-1 →

千田では、汚くて狭かったお店を御利用いただきありがとうございます。西条キャンパスでは西2店という新しく大きな店が総合科学部横にできますので、御利用ください。そこでまたお会いしましょう。  
(生協購買部 宮本)



← 3-2

二食は量が多く安いので男子学生の友である。うどんは会館食堂の1.5倍の量はあったと思う。しかし、総科が移転したら二食はつぶれるのではないか。

↓ 3-4

西条の家を探すのに予約制というのはつらい。普段、不動産部など訪れることのない我々にとって記憶に新しいのは10月上旬、西条キャンパスでの住居斡旋の予約を勝ち取るために作られた長蛇の列ではないだろうか。並んで待つこと2時間、その混雑ぶりはさながらロシアの肉屋である。あれから2ヵ月、はたして彼らは新しい住居にありつけただろうか。



↑ 3-3

様々な情報が飛び交う総科前の掲示板。プロレスラーのだれかさんを見れば分かるように、何をしてもよい(というわけではないのだ)。



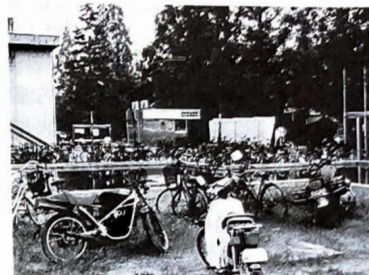
行きたいときはいつでも閉まっている生協プレイガイド。このカーテンを見て腹をたてたことが一度はあるはず。

→ 3-5

一食前のジュースは安い。これは嬉しい。しかしなぜここだけ値上げしなかったのか。いや、値上げしなくてよかったのか。



# 記録する 3. 生活編



← 3-6

この水たまりは汚い。たぶん昔は噴水の水が出ていて、学生のいこいの場であったのだろう。今では体育会学生の落ち場となっているらしい。利用価値がなくなったわけではないようだ。こわれた自転車がここにたくさん並んでいるのはなぜだろう？

→ 3-7

入ったことのない人には分からないだろうが、サークル棟内部の写真である。壁の汚れやチラシの華やかさが广大生の芸術に対する情熱を思わせる。



↓ 3-8

毎回趣向をこらした正面玄関の看板。しかし破れているのは別にわざとではない。ちなみにスクーターは駐車違反。

↘ 3-9

「ボランティアじゃねえぞ」発言も生まれたという「飛翔」の編集会議室(プレハブ3号棟の学生研究室)。このゴミゴミした部屋ともお別れして、来年は西条の新しい部屋で新たにがんばるつもりです。



← 3-10

ゴミ箱に入りきれない不燃物の山。普段から何も入っていないゴミ箱を当てるのはなかなか難しい。たまに猫が入っているので注意が必要。



# 東広島市・西条情報：移転先あれこれ

吉村 慎太郎 (地域文化コース助教授)

「遂に」と言うか、「やっと」と言うべきか、総科にとって大事業の移転がカウント・ダウンを開始した。何が飛び出すか分からないまさしく「パンドラの箱」を開けるが如き移転を目前に、期待と不安が錯綜する心的状況は多くの学生・教官・職員に共通する。

## 先に立つ「不安感」

しかし、矢張り不安の方が根強いようである。この点は私が9月の前期英語試験終了後に工学部・教育学部所属の1年生計119名を対象に行ったアンケート調査結果からも明らかであった。その中で、移転先西条キャンパスの「印象」について「広い、きれいな、新しい、環境が良い」といった「プラス・イメージ」の反面、「寂しい、寒い、生活が不便、田舎」等々、「マイナス・イメージ」が圧倒的に目を引いた。これらの負のイメージは回答者の110名までが2度以上新キャンパスに足を運んだ学生であるだけに、無論単なる「妄想」ではない。特に、具体的な不安材料としては「コンビニエンス・ストア、食事場所の少な

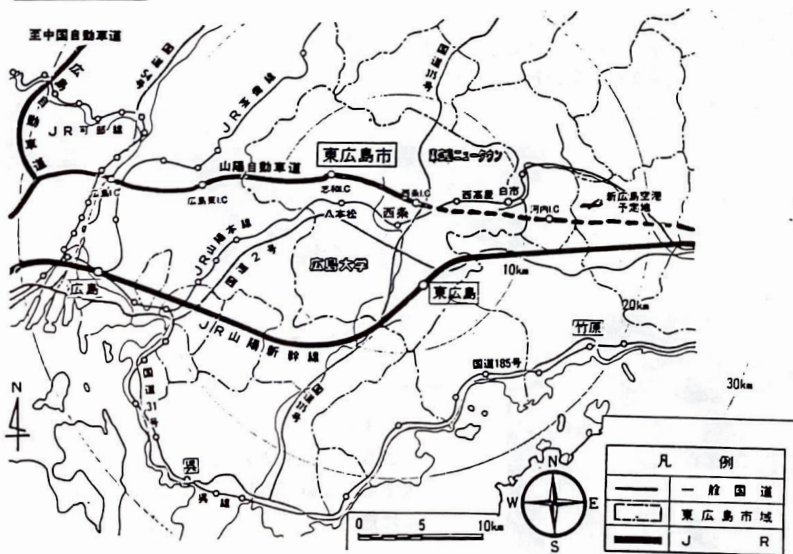
さ、(79名)、アルバイト機会の少なさ(17名)、交通の便の悪さ、遊び場所の少なさ(7名)」などが挙げられている。

以上のような不安は無理からぬところとはいえ、それは情報不足によるところも大きく、又多少見方を変えれば、その不安は若干なり緩和されるであろう。そのために、まず移転先である東広島・西条について少しでも知ることから始めてみよう。

## 東広島・西条概観

我が総合科学部の移転先は平均高度210m、400~600mの丘陵高地に囲まれた県内屈指の規模を持つ西条盆地にある。この盆地を有する東広島市は地理的には広島県のほぼ中央に位置し、面積的には288.45km<sup>2</sup>であって、その市制の歴史は1973年2月の広大統合移転の決定を契機に高まった「学園都市」建設の気運と無関係ではない。翌74年4月に賀茂郡内の西条、八本松、志和、高屋の4町が合併して県内12番目の市として成立したのが東広島市である。

東広島市位置図



このように広大移転決定と共に始まった同市の歴史はわずか20年足らずとは言え、県内最大規模で、西条盆地御園宇にある前方後円墳の三ツ城古墳(5世紀中頃)、その南方のスクモ塚、西条駅北東徒歩10分のところにある安芸国分寺(741年創立)、その他下見の福成寺(11世紀初頭)、医師・学者として知られる野坂完山(1785~1840)の墓(蓮花寺)など、国及び県の歴史的文化遺産は多い。又、広大キャンパスのすぐ東隣には室町・戦国時代の豪族の居城鏡山城跡があり、そこに鏡山公園が85年に開園している。



安芸国分寺

このように多くの史跡を持つ西条は古代にあっては安芸国の政治・文化の中心であり、又九州太宰府に通じる山陽道の駅であった。近世になってもこの宿場町としての賑わいは変わることなく、更に明治以降酒づくりの町として全国に知られるようにもなった。ここでの酒造業は広島県の清酒生産量の約3分の1に達し、「酒都」西条として兵庫の灘、京都の伏見、新潟と共に日本の名醸地である。

こうした歴史と特性を持つ東広島市の人口が広大統合移転決定後、急増していることは注目しない訳にはいかない。4町合併当時、6万3,866人であった人口は92年9月には10万人を越え、尾道を抜いて県内4番目の人口規模を持つ市となった。広大移転の完了する95年までには更に人口は15万人まで拡大すると予想され、都市機能の拡充で一層の発展が期待できるのである。この意味でも、移転先の東広島・西条は現在決して「寂しい田舎町」というのではなく、古い歴史に依拠しつつ急成長を開始した都市である。

## 建設進む様々な施設

広大移転が中心をなす賀茂学園都市構想及び広島中央テクノポリス構想の一貫として、現在東広島には様々な施設が既に完成、又は計画・建設中である。その幾つかを紹介すると、まず西条御園宇にある広島中央サイエンスパーク(全敷地面積31.7%)がある。広島中央テクノポリス地域の中心を構成するこの敷地内には既に研究開発・人材育成などの総合的支援機能を持つ第3セクター方式の広島テクノプラザが92年4月にオープンしている他、国税庁醸造試験所(95年)及び中国電力技術研究センター(94年)の建設も決定している。このサイエンスパークは広大新キャンパス南東部に隣接しており、今後の広大の研究・教育機能の発展に少なからぬ影響を与えるものであろう。又、南の隣接地域には既に体育館がオープンした東広島運動公園(17.3%)の建設が進められている。ここには陸上競技場、野球場、テニス・コート、屋内プールその他スポーツ・リクレーション施設が完備される予定である。



ブルーボール通り

そして、広大新キャンパスひいては以上の諸施設を繋ぐ「動脈」として西条駅より鏡山公園に至る全長5.1キロ、幅員25~38mのブルーボール(西条駅大学線)がほぼ完成している。これまで西条から大学へのアクセスは道幅が狭く、しかも交通量の多い国道375号線に依存してきたが、ブルーボールの開通でバスによる大学へのアクセスが時間的にも7分以上短縮され、交通安全の度合いも高まる



う。又、このプールプール沿いに東広島市中央図書館の建設も予定されている。更に、重要なのは広大新キャンパスの北側プールプール沿いに下見学生街の建設計画が着々と進んでいることである。

その他隣接する豊田郡に93年12月開港予定の新広島空港も含め、広大新キャンパス周辺の環境は将来的な計画実施によるところが大きい。着実に変化しつつあり、その成果の一部は既に認められる。まちのあり様を決して静態的にとらえない考え方が望まれる。

東広島島の祭・行事

と言っても、「それは将来のこと、今の不便さをどうするか」と言った声が聞こえてきそうである。「ひたすら勉学に励んでもらいたい」と言っても説得力がなからう。その向きには勉強の合間に東広島島の様々な行事への積極的な参加を呼びかけたい。表に挙げた行事・祭には私自身も何度か参加したが、極めて有意義な一時を過ごせること請け合いです。こういった時にこそ、特に大都市広島に少ない「人と人との触れ合い」を感じる。それこそ、「発展途上」の中小都市に暮らす醍醐味でもある。

東広島島の年間行事

1月中旬	新春駅伝競走大会
2月11日	東広島ロード・レース
3月下旬	市民芸術祭
5月	市民スポーツ大会
7月上旬	土曜夜市
& 8月中旬	
8月中旬	東広島盆踊り大会
9月上旬	市民スポーツ大会
10月上旬	酒祭り
10月下旬	東広島福祉祭り
11月下旬	生涯学習フェスティバル
11月中旬	市民コンサート
11月下旬	市民芸能祭

学園都市とは？

東広島島の目指す都市像はかつての宿場町、酒都から「学園都市」へと移行しつつある。この点は「東広島市民憲章」中にもうたわれ、

又92年9月16日開催の「まちづくりシンポジウム1992」の中でも、議論の前提となった。それでは「学園都市」の条件とは何だろうか。

賀茂学園都市開発基本構想に携わり、そのシンポジウムで基調講演を行った土肥博至教授（筑波大学）によれば、「①人間、特に学生を暖かく迎える、②豊かな自然環境の存在、③おしゃれな、若者が楽しめるまち」であることが挙げられている。上記の条件の内、②は現状で申し分なく、敢えて言えば、開発の行き過ぎから自然破壊の危機の方が大きい。①及び③は特に「学園都市」成立の重要な課題であることに疑問の余地はなからう。①について言えば、それは逆に広大学生自身の側での町に対する思いやりの必要性も問題にされねばならない。先に挙げた諸行事への参加、まちづくり事業への貢献によって、③の条件も左右され、今後「学園都市」東広島島の将来があるとも考えられるのである。



プリンストン大学中央図書館

私が留学したプリンストンも学園都市の一つに数えられるが、十分先の3条件を満たしている。プリンストンではまさに大学がまちの「顔」であり、大学のスケジュールに従ってまちの趣も変化した。リスが遊ぶ緑豊かな自然と歴史的なまちなみ、その中で勉学に励む学生の熱気が独特の雰囲気を作り出していた。そもそも学園都市には大都市の喧噪・利便性は必要ないかもしれない。「学園都市」を支える広島大学の一層の質的向上への転機が東広島への移転によって助長されることを強く望みたい。

山積する課題の中で

無論、東広島は未だ学園都市への移行過程にあり、課題は山積している。新聞紙上を賑わした学生下宿不足問題がその最たるものとして挙げられる。これについては、詳しくは「広大フォーラム」(1992年9月21日発行、No.299号)に特集されたところでもあり、ここでは言及しない。私がこれに劣らず重要と考えるのは西条・八本松両駅からの新キャンパスへの通勤・通学手段に関わる問題である。冒頭に挙げたアンケート調査では下宿不足、交通の便の悪さが手伝い、バイク・自転車通学者が76名、自家用車による通学希望者が43名(一部重複)であった。



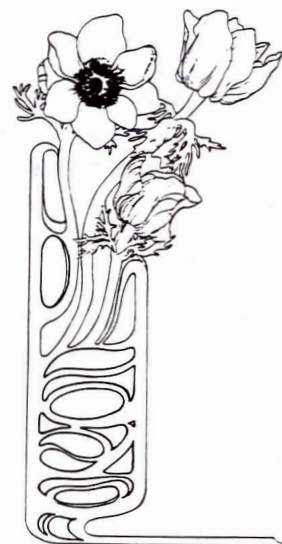
西条酒まつり風景

当面直ちに大学周辺の下宿不足問題が解決されないとすれば、必然的に最寄りの駅からの通学になるが、その際現状のバスの運行便数(八本松・西条～大学間計34往復)では益々学生による自転車・バイク、自家用車通学が増える。しかし、朗報としてJ Rバスの担当者の方の話では、93年3月末のダイヤ改正で現状よりも10数本の増便方向でJ R及び芸陽バスの間で検討中ということである。又、西条・大学間の現行運賃270円についても、それ自体引き下げは困難であるが、通勤・通学定期の割引率はそれぞれ2割8分、4割であり、15キロ以上の区間分については8割引きと言う。

93年3月以降、適宜利用者の希望と接続列車との状況を勘案して、増便を含むダイヤ改正に前向きに取り組んでいきたいとのことであり、これに期待したい。自転車・バイクによる通学の増加は西条キャンパスでの駐輪・

駐車場不足の深刻化、交通事故の多発さえ懸念され、ひいてはバス運行便数の減少にもつながり、この問題への大学当局の積極的な取り組みが望まれるところである。

14世紀のイスラーム世界の歴史家イブン・ハルドゥンは世界をハドル(文明・都会)とバドゥ(田舎)の二極対立でとらえ、この両者の盛衰が4世代で循環するとの歴史観を提示し、後生の歴史家に大きな影響を残した。広島の一周辺都市に過ぎなかった東広島が「学園都市」建設を通じて周辺から中心へ移行する可能性を考えれば、このハドルとバドゥの関係で歴史を動かすと位置づけられた「連帯意識(アサビーヤ)」こそが東広島市民は言うに及ばず、広大学生・教官・事務職員にも問われている。「学園都市」東広島島の発展と広大の発展が不可分であることを今一度確認したうえで、冒頭に挙げた不安を解消し、有意義な学生生活を送ってもらいたい。





## 歓迎・総合科学部移転

宝積 良忠（東広島青年会議所理事長）



ご存知のように、東広島市西条は古来から中世にかけて、安芸国における政治・文化の中心地でした。それが、毛利氏が居城を構えたことや近世以降の水運と商業の発達もあって、その役割は広島が担うことになりました。明治以降も広島市は軍都として急成長を遂げましたが、西条はつい最近まで内陸部のどこにでもあるような田園地帯にすぎませんでした。

ところが1973年に広島大学が当地に移転することが決まると、あれよあれよという間に新幹線駅が開業し、山陽自動車道が開通し、新広島空港の立地がすぐ近所に決まり、広島中央テクノポリスの中心地となるなど、再び広島県の文化・経済の中心地とならんばかりの勢いで成長しました。

これもまた陸上輸送が交通・流通の主役となったこと、広島市の都市機能が硬化して新陳代謝が活発でなくなったこと、賀茂台地周辺には開発可能な土地資源が豊富にあるなど諸々の原因があるのでしょうか、それはさておき、どこか官庁街にあるビルの一角で、誰かが初めて「ここ」と地図上の当地を指さしたことを、当の住民は決して有難がっているわけではないと思います。

再度繰り返しますが、広島大学が当地に移転することを、当地の住民は喜んでばかりいるわけではないのです。おそらく多くの住民にとっては、移転決定は寝耳に水でしたし、また住民の生活自体にはあまり関係のないこととしか受け取られていなかったのではないかと思います。

しかし、まちの様相が先ほど述べたように大きく変わるのを見て、地域の活性化を喜ぶ

反面、非常に急激な都市化に不安を抱くようになりまして。

そして移転が本格的になった現在、かなり改善されてきたものの大学はまだ象牙の塔のような存在であり、市街地調整区域には安普請の学生向け下宿が雨後の筍のごとく林立して都市外観は台無しになり、そこに住む学生達は周囲と切り放されたような暮らしをしています。地域とのコミュニケーションがないため、一部学生の傍若無人な振る舞いが学生全般に対する誤解を生みかねないような状況です。

また一方、学生・教職員をはじめとして、新たにこの地に居を構えようとする人々からも、受け入れ体制の不備や都市基盤整備の遅れなどが指摘されています。特に、学生向けアパートは大学周辺に数多くありますが、その生活を支える飲食店や金融機関・スーパーマーケットが未整備であるため、ちょっとした買い物や外食にも車が必要であるとか、都心部の商店街やショッピングセンターにしても、広島での生活に慣れた方々にはいろいろと物足りない面があるようです。

これらの責任を行政にばかり押し付けることはできません。地域住民の側にも新しい学園都市を創造して行こうという熱意に欠けていた面があります。が、また同時に大学や学生にも、千田キャンパスに後ろ髪をひかれる思いがなお強くあり、当地での学園建設にいまひとつ積極さが欠ける結果になっているのではないのでしょうか。

「好き好んで移転して来たわけではない」大学側と、「頼んで来てもらったわけじゃない」地元側。お互いコミュニケーションの無いままひたすら突き進んできた学園都市建設。このままではいけないことに、多くの人が気づきはじめています。

先の9月16日、東広島市において「まちづくりシンポジウム1992」が開催されました。その基調講演にお招きした筑波大の土肥教授は当地の都市計画に最初から関わっていらっしやった方ですが、現在の状況を見て「大学を孤立させぬ営みを」と訴えられました。シンポ終了後、聴衆のアンケートには、私たちが驚くほどの数の意見が寄せられていました。

シンポでは、当市の今後のまちづくりにおいて、行政や大学を巻き込んだ市民会議のような仕組みが必要であることが指摘されました。これは私たちJCNなど民間の都市づくり推進団体に対して投げかけられた最重要課題であると認識しています。

現在、下見学生街の建設が進行中ですが、そこに関わる人々の熱意には学ぶべきものがあると思っています。土地を提供する方々が行政の指導を受けながら、昼間の仕事を終えた後集まっては街の骨格やまちづくりのルールを話し合い、資金問題に頭を悩ませておられます。そこには、一部ではありますが教職員や学生の方々も参画していらっしやいます。

大学から下見学生街へ寄せられている期待は相当なものがあるようですが、こうしたまちづくりの努力を見るにつけ、それがもしかすると“受け入れのお膳立て”への期待ではないかと危惧せずにはいられません。

つまり、私たち市民は大学を受け入れるに当たり、すべて準備を整えた上で“お客様”としてお迎えするつもりはまったくないということです。これは下見学生街だけでなく当市全般についても言えることなのです。

ここまでかなり挑発的な表現となりましたが、特に知っておいていただきたいのは、東広島は、ある意味では、まだまちづくりの草創期にあるということです。盤の上におちまけられた駒を並べている時期のような気がします。この期にあつて、大学・学生とそれを受け入れる側の私たちとの間がお互い一方通行であつてはなりません。大きな夢は膨らみ

ますが、その実現にはやはりお互いの協力が必要です。いま私たちがご用意できるのは、新しい学園都市の創造を目的として一緒に努力するための素材とテーブルでしかありません。私たちも、大学・学生という新しいエネルギーに対して大きな期待を持っているのです。

学生下宿が足りないとか嘆く前に、ホームステイできないか一緒に尋ね歩きましょう。スーパーマーケットが近くに無いなら早期誘致のための運動を一緒に起こしましょう。商店街が時代遅れなら一緒に要望書を作りましょう。夏時分に窓から虫が入って困るなら一緒に殺虫剤を撒きましょう。交通が不便なら新しい交通システムを一緒に提案しましょう。都市景観をどうしたらいいか相談にのって下さい。新しいコミュニティをどう作り上げていったらいいか一緒に考えて下さい。ただ余っているだけの自然を、都市づくりにどう活かすべきか一緒に考えて下さい。開通したばかりのプールバールが、名実ともに大学と都市とをつなぐ道になるよう一緒に努力しましょう。

私たちは、大学や学生・教職員の方々に、学識経験や単なる助言だけではなく、そういった熱意をこそ強く望みます。このまちに住んだら、まじめに勉強したりスポーツしたり異性とデートしたり飲み屋街でおだをあげたり家族サービスしたりパソコンをいじったりするというこれまでの生活に、まちづくりの楽しみも是非加えて下さい。

このまちに骨を埋めて欲しいとまでは言いません。しかし、たとえわずか数年間であっても、このまちでの人生をまちと関わりながらいきいきと暮らして下さい。

私たちもまた、このまちが、一度でもここで暮らした人々にとって心の故郷となるよう、日々頑張りたいと思います。





## 思 い 出

小林 博 (生体行動科学コース教授)



広報委員会「飛翔」担当委員の笠井さんから、千田キャンパスにおける総合科学部20年の思い出をエッセイ風を書くよう依頼された。聞けば学部の移転に伴う千田キャンパス思い出特集にするそうだ。私にも思い出は沢山あるが、今回は私の全く個人的な思い出に終始し、しかも学部創設前の教養部時代から始めることをご容赦下さい。

□

昭和44年、私が医学部から教養部助教として来たとき、教養部の建物は中核の学生に封鎖され、教官は図書館の3階で無為な毎日を過ごしていた。そんなとき新米の私に学務委員をやれという話があった。たまたま委員長の松尾先生が病気で入院し、上垣内先生がその後を継いだのが、1人不足なので補うということだったらしいが、全く事情のわからない新参者が学務委員をやるなど異例の事であった。仕事は封鎖が解除された後再開する授業の計画作成であった。情勢が日々変化するので、計画を作ってはこわし、また別の案を作るというしんどい作業であったが、一緒に仕事をした同僚はいい人ばかりだったし、多くの女性事務官も手伝ってくれて結構楽しかった。そこでよせばいいのに少し元気を出し過ぎて目立ち過ぎたようだ。封鎖が解除されてからも次々と委員の役がまわってきた。改革委員、教養部特別委員、同将来計画委員、総合科学部設立準備委員、同推進委員、学科主任と、助教授の私がなぜこんな事までやらねばならぬのかと思うほど多かった。総合科学部創設後教授に昇任してからは益々ひどく、コース委員、学務委員長、コース委員長、はては評議員までつとめた(実際につとめた委員名はこの3倍以上あるが、全部書くこと

なくなるので書かない)。これもすべて最初の委員会で少しはしゃぎ過ぎたためかと、身からでた錆を自省の眼でみつめている。

□

このような荒れた生活のつけは直ちに研究面に現われた。医学部時代から毎年平均2編は必ず英語の原著論文を書いてきたが、昭和50年から2年間論文ゼロの年が続いた。なんとか立て直しをせねばとあせっていたとき教えてくれたのは新しく学部へ赴任してきた宗岡、安藤両教官であり、私と一緒に研究をしてくれた多くの優秀な大学院生達であった。特に宗岡さんは私の仕事を評価してくれるとともに、新しい研究の道を開いてくれた。また、研究者として総合科学部へ赴任してきた人達は、みなお互いの研究に協力的であった。私は総合科学部が設立されて最もよかったことは、立派な研究者が協力し、次代を担う弟子を持つことが出来るようになった点であると思う。つまり、教育集団から研究集団へと脱皮することが出来たのである。

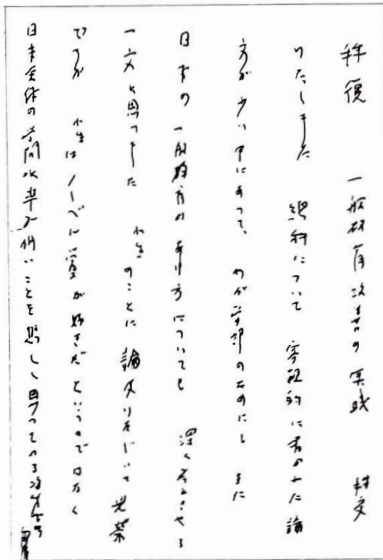
□

この脱皮に最も力を尽くされたのは、いうまでもなく今堀誠二先生であった。先生の教養部長及び総合科学部長時代、私はいくつかの委員会で末席に座らせて頂き、先生のご高説を拝聴する榮に浴した。先生の発言はいつも実に歯切れがよかった。時には中国研究者らしい白髪三千丈流の表現に驚くこともあったが、「私はどんな生活をしていても1日たりとも研究を休んだ事はありません」と云い、事実次々と書物を著わされた。また、当時荒れていた左翼の学生を前にして、「私は講義をするに当たっては、君達が図書館で本を読むより、他人のノートをみるより、他の如何なる方法によるよりも、私の講義を聴く方が、

よりよく、より正しく、より面白く、より能率的に理解できるように、それだけの準備をし、自信も持って臨んでいる」と言われるのを聞いた。私もいつかこんな啖呵が切れるようになりたいと願っていた。3年ほど前、講義の最初の時間に思い切ってぶちかましたら妙に自信がついてきた。

□

昨年、一般教育学会の求めに応じて「一般教育改善の実践」という一文を書いた。今堀先生のご功績にもふれ、先生がノーベル賞級の学者ということをよく口にされていたことを書いて、先生に別刷りを献呈したところ、すぐさま病床の先生から返書が届いた。(写真) 今堀先生の面目躍如たる文面を拝しながら、先生のご冥福を祈る。



故 今堀先生より 小林先生宛てハガキ

## 総科教師失格の記

頼 誠一 (地域文化コース教授)

「イヤー、頼君!君にだけは来てほしくなかったヨ。今からの総合科学部は、英語で日本史の講義できるような女がいるんだヨ。しかしマア、頑張ってください。」1977(昭和52)年4月、今堀学部長のところへ辞令をもらいに行った時、先生は開口一番、こう言われた。私は後藤陽一先生の後任ということで、渡辺則文先生にヒロツテもらったので、学部創設時に招かれた“ノーベル賞クラス”の人材でないことはよく承知していたが、この先生の言葉にはギャパンといわれた。深堂和男先生から「あと3年位で西条へ行きますから、申し訳ないけどそれまでここでガマンして下さい。」と言われて、新築のプレハブ5号棟2階端の1室(なんと26㎡もある)を教官室としてもらった。助手の堤正信さんや、現在、同じ講座にいる中山先生(当時3年生)らが、

先輩の先生方から引継ぎの、由緒ある、重たい備品や、私物の本・資料を運び込んでくれた。

文学部の助手時代は、文共斗やそのシンパの学生に迫られ、“造反教師”の瀬戸際までいき、その罪ほろぼしとして、大教センター講師(全学借定員)ということで「広島大学25年史」の編集に従事していた私は、研究室をもらって研究できるようになったことが、何よりもうれしかった。「総合科学」部とはヘンな名称だと思っていたが、創設に至る経緯や理想は知っていただけに、「インディアン」でも「白人」でもない“混血児”として頑張ろうとひそかに思った。最初に学務委員になった時、井上千吉先生から「キミー、来た早々学務委員をやるということは、ここではエリート・コースだよ。」と言われて驚いた。確